（十四）山科川

音羽山の木々から滴り落ちた水はせせらぎとなり、やがて大きな川となって山科のまちを潤しています。名神高速の東側まで山科川ですが、地域では旧安祥寺川との合流点から下流が山科川と呼ばれることもあります。

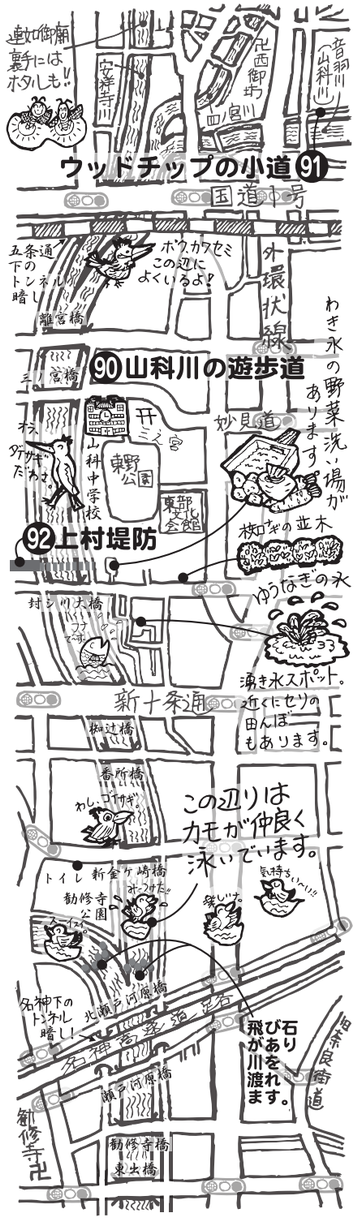
山科川は昔は暴れ川でしたが、改修され、安全な川に生まれ変わりました。水質が悪くなった時期もありましたが、今はホタルの舞も見られます。自然を取り戻した川は貴重な都市空間として、私たちに潤いを与え続けてくれるでしょう。川の自然は多くの生物を育んでいます。魚ではコイ・ハエ・カワムツ等が棲んでいます。野鳥では冬はコガモ・マガモ等のカモ類が、夏はササゴイ等のサギ類がやってきます。また四季を通じてカルガモ・ダイサギ・コサギ・アオサギ等がおり、まことににぎやかです。特にカワセミの姿は粋美の極みです。

山科川の住人

山科川（三ノ宮橋から下流を望む）

90 山科川の遊歩道

堤防には遊歩道が設けられ、手軽に散策が楽しめます。水辺に降りる階段もあり、川と親しむ工夫がなされています。特に三宮橋下流左岸は、美しく舗装され、サクラ等が区民の手で植えられ、住民の憩いの場になっています。この付近は扇状地にあたり、川底から水が湧き出ており野鳥もたくさん見られます。



91 ウッドチップの小道

音羽川小学校付近の堤防は木っ端（廃材を再利用するためにチップ状にしたもの）で舗装したエコロジーな道です。音羽山や周辺の風景に溶け込み、落葉の積み重なった山道を歩いているような感触が足に伝わってきます。

ウッドチップの道

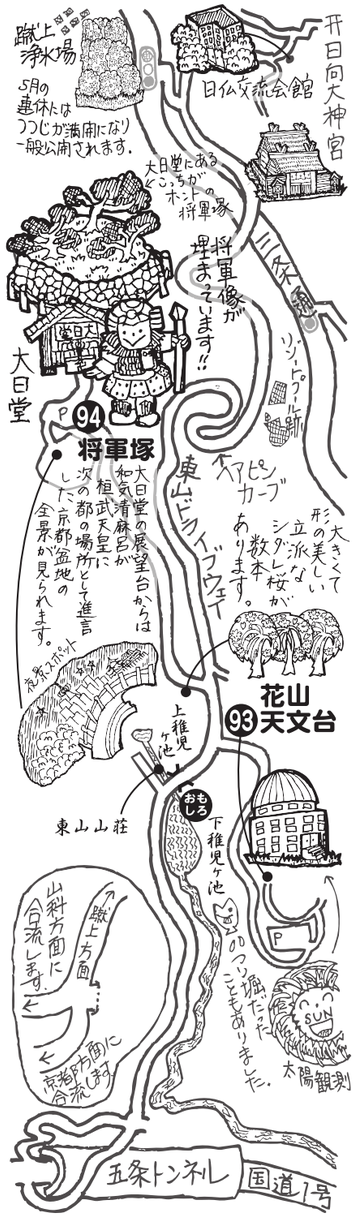
92 上村（うえむら）堤防（水堤防）（私財でできた農業用水路）

大正後期、私財を投じ、音羽川から取水し、水路で川をまたぎ東野森野町へ導き、さらに分水して勧修寺付近の田まで引き入れた人がいました。上村堤防と呼ばれるこの大規模な農業用水路には、今はなきレンガ造りの立派な水路橋（写真参照）が架かっていました。現在は鋳鉄管に姿を変えて今も利用されています。

大事業がしのばれる水路橋

（十五）東山ドライブウェイ

東山ドライブウェイは京都の東山を縦走する道で、府道三条通と国道一号に入口があります。一九二七（昭和二）年に花山天文台建設に先立って伏見工兵隊の手によって新道が敷設されたのが元になり、一九五九（昭和三四）年に日本道路公団により開通しました。



93 花山天文台

一九二九（昭和四）年に完成した京都大学花山天文台は、開設当時は五層よりなるドームを設け、大赤道室は直径九メートルの円形をしていました。中には英国クック社製三〇cmの屈折赤道望遠鏡を置き、当時はアジアで最大の屈折望遠鏡でした。現在も、現役で活躍し、太陽の黒点観察など、最先端の宇宙研究を続けています。

94 将軍塚

東山ドライブウェイから「将軍塚」にある展望台に登ると、京都の全景が見られ、夜になれば「百万ドルの値打ちがある」といわれる美しい夜景が見られます。

この「将軍塚」は、桓武天皇が平安京を造営した時、王城鎮護のために長さ八尺（約二・五m）の人形を土で造り、それに鉄の鎧（よろい）を着せ、鉄の弓矢を持たせて西向きに埋めたのが発祥とされています。その土偶を埋めた塚も現存しています。

古来より天下に異変のあるときは、この土偶が前兆を察し、塚がうなり響いたといわれていて、平安末期の「源平合戦」の時には、特に大きく鳴り響いたという記録も残っています。

また山頂には「大日堂」があって、大日如来石像を安置しています。現在は青蓮院（しょうれんいん）が管理しています。この青蓮院は、中世（鎌倉～室町）には、北花山郷の領主であって、地元北花山とも関係が深い寺院です。

おもしろ！ 稚児ヶ池

将軍塚から東山ドライブウェイに沿って少し南へ行くと「稚児ヶ池橋」という橋があり、その西側に大変小さな「上稚児ヶ池」、東側に少し大きな「下稚児ヶ池」があります。

稚児ヶ池の水は、山科・北花山地域の灌漑用水として利用されてきました。この池から流れる稚児川は、丘陵地帯で常に水不足に悩まされてきた北花山地域にとっては、古来からの「生命線」でした。

戦後、稚児ヶ池一帯は、釣り堀池として利用されたこともありました。また、地域の古老の話では、学校にプールがないころ、子ども達もよくこの池で泳いだといいます。